

# 地域ととものに

古民家の再生。  
大学と地域を繋ぐ  
交流拠点に

創立五十周年記念館「角間の里」が完成

特別対談「角間の里」

金沢大学長 林勇二郎 × 北陸朝日放送社長 角間俊夫

温泉研究が街の活性化に  
柴山潟から片山津再興  
商工関係者と特産品開発

地域課題研究セミナーの持つ相乗効果  
地域が先生となり広がる笑顔と知識

地域活性化プロジェクト始動  
大学と住民一体で  
石川の特徴浮き彫りに

動植物とのふれあいから学ぶ  
自然が先生、角間の里山自然学校

魔法の薬が緑化を後押し  
世界の砂漠を潤いの大地に

手をつなげば、  
きこえつまくらぐ。

大学の「知」と地域の「活力」  
連携から広がる無限の可能性  
皆さんと一緒に、この街を、そして住む人を元気にしていきたい

地域とともに  
金沢大学社会貢献室

私たちは、金沢大学の社会貢献活動を応援しています!!

朝日新聞

北陸銀行

MEIDEN

明和工業株式会社

株式会社アクトリー

都市と大学 学都 北陸の観光 彩都  
季刊情報誌 文化情報誌  
都市環境マネジメント研究所

i2 アイ・ツー  
www.i2-jp.com

コミュニケーションの未来に向かって  
熊登印刷株式会社



金沢大学創立五十周年記念館「角間の里」が完成

# 歴史を受け継ぐ 地域貢献の拠点

旧白峰村より金沢大学に移築し、今年の春完成した「角間の里」。  
村の名士である山口家の母屋として江戸時代から約280年の歴史を刻み、  
時代の移り変わりの中でも村の精神的支柱となってきた。  
大学は山口家や村民の意思を受け継ぎ、  
地域貢献の拠点として活用する方針である。

学生編集委員 山内 学



## 白峰の歴史を刻む母屋 村民の社交的役割も

旧村民で梶立白山ろく民俗資料館の山口一男館長によると、山口家は江戸中期に大規模な養蚕や酒造を行ない、それ以降も庄屋を務めた旧家で、移築された家は元禄年間の大火で焼けた後すぐに建てられた。山口家はリーダーとして村の発展に努める一方、多くの村民は山口家を敬愛し、村の寄り合いや、青年たちの歓談の場、子どもたちの遊び場として集い、近年までコミュニティを育んできた。ところが昭和53年、山口家は手取川ダ



太く重厚な梁がこの家を支え続けている

ろが昭和53年、山口家は手取川ダム建設によって水没の危機にさらされた。当主は家の解体を考えたが、移築したいという村民の希望で、資料館「桑島の里」として再出発した。しかし、後年、経営難に陥りやむなく村に譲渡した。

## 存続の危機に直面も 大学と出合い移築へ

平成11年、金沢大学は創立50周年を迎えるにあたり記念事業が展開され、その一環として今までの大学にない記念館を建設することになった。資金は卒業生や企業からの募金で賄い、数ある案の中から古民家を移築する案でまとまり、古民家探しが始まった。石川県内には古民家が数多く残っているが、歴史的価値の面から納得できる物件はなかなか見つからなかった。

「村が「桑島の里」の運営に苦慮し、協議を重ねていた」（永井隆一元村長）ころ、大学が古民家を探しているという情報が入り、平成15年初めに山口家の存在を伝えた。橋本哲哉副



ビジョンを語る橋本副学長

一方で、突然の移築話村民たちは困惑した。山口家は村民の心のよりどころであり、長い間村を支えてくれたことを、村民は忘れていなかったのだ。山口家の喪失は村、特に桑島地区の存在意義も見失いかねない。だからこそ

ダム湖の湖底に沈む運命にあった山

口家を移築してまで村に残そうとしたのだ。幼いころから出入りし、特別の思いを抱く山口館長は「個人的な思いもさることながら、山口家は白山麓の歴史的側面から見ても価値の高い建物であり、将来の維持が困難というだけで安易に移築を決めるわけにはいかない」と村の方針に反対した。だが村に残しても維持が難しく、山口家の歴史的価値を考えた末に「基本的な構造さえ残し、活用してもらえないのなら、移築もやむを得ない」と移築に同意した。

村議会の承認を経て平成16年春から解体・移築工事が始まり、翌年3月に角間キャンパスに珍しい木造建築が現れた。山口家は解体の危機から「角間の里」として生まれ変わったのだ。

人々が集う場としての役割は今も変わらない



## 知りまっし 1

### 山口家と「角間の里」の歴史

七世紀後半	山口家の祖、京善藤九郎が嶋村(白峰村桑島)を拓く(伝説)
戦国期	山口家、小倉家と分立
江戸期	山口家代々庄屋を務める
元禄10年	白峰村桑島地区全体が大火に見舞われて家が焼失。直後に再建
明治期	山口家、明治22年まで桑島村(白峰村桑島)の村長を務める
昭和53年	手取川ダムで白峰村桑島水没。水没記念公園「桑島の里」に山口家を移築
平成17年	山口家を金沢大学に移築、「角間の里」と名づけられる

## 大学と地域を結ぶ拠点 「角間の里」で再出発

山口館長は改築中の「角間の里」に足を運んだが、周辺風景が幼いころ慣れ親しんだ桑島の風景にあまりにも酷似していることに驚い



風格を漂わせる「角間の里」。この地で新たな歴史を刻んでいく

たという。「大学に移築したとはいえ、地域貢献の拠点としての役割は旧山口家と変わらない。山口家とともに生きた村の人も関心を払っており、訪れた人々に山口家の歴史を知ってほしい」と期待を寄せる。

橋本副学長が「今後の大学は学内関係者の利用に限ってはいい」というように、「角間の里」は今後、大学の学術研究に限らず、広く地域の人々が参加できる学習、交流の拠点として活用される。一般に開放される「角間の里」は、これからの大学が歩むべき方向性を示しているといえ、学内のモデルケースとしての役割も担わせていく。橋本副学長は最後に「法人

化によって財政・人材面の問題があるが、チャンスと捉えてチャレンジ精神で事業を展開していく」と熱い抱負を語った。

280年もの間、白山麓の厳しい風雪に耐え、地域の拠点として村に大きな貢献をしてきた山口家。今「角間の里」として新たなスタートを切った。だが、建物そのものが地域貢献を担うのではない。そこには活動した人々の歴史が受



思い出を語る山口さん

け継がれている。「角間の里」は中継地であり、ランナーである人々がつないでいかなければ、地域貢献にはならないだろう。大学に中継地があるなら、そこで学習する学生や地域の人々もランナーにならないわけにはいかない。



古民具が昔の生活を偲ばせる

## 「角間の里」と木造技術

松島建築設計事務所主宰

松島健氏

松島さんは「歴史的建物を理解するにはどんな時代背景があったのか」が必要だと言う。「角間の里」は豪雪地帯である旧白峰村にあつ

たため、頑丈で腐りにくい栗の木を使用した。また養蚕工場として、冬場の室温維持等の工夫が見られる。「里」は目的に合わせて作られた。

そして「里」の素晴しさは同時に日本の木造建築技術の素晴らしさである。古来、日本は世界でも類を見ないほど木造建築技術を地域

## 知りまっし

2

## 専門家から見た「角間の里」

ごと「方言のように」発展、地域ネットワークを形成した。現在、日本の伝統的木造建築技術は「忘れられている」傾向にあるが、昨今の環境問題により木造の良さを「思い出す」好機ともいえるだろう。

## 移築担当者も唸った古の匠の技術

松浦建設株式会社

中嶋晃氏

中嶋さんは旧山口家母屋を見て今までに携わったことのない大きな建物、正直自信はないと不安で

あつたが、「自分たちがやらねば誰がこの素晴らしい技術を伝えるのか」と思い直し、約280年前の匠の技術に挑んだ。匠の技術は容赦ないもので、随所に見られる複雑で壊れやすい構造に対して、バランスよく解体することに苦戦した。一方で古い柱との調和に新木に塗料を塗るなど古の匠に立ち向かい続け、古い柱にできた隙間に電線を通したりするなど、自らの現代技術を「里」に刻んだ。

最大の建物を改築した中嶋さんの「古いものを大切にし、美しく見せる」という言葉には穏やかながらもプロとしての意気込みが感じられた。

**創**立五十周年記念館「角間の里」は地域交流の拠点、あるいは研究・発表の場として利用されるが、金沢大学のゲストハウスとしての役割も担っている。そこで、角間の地とゆかりのある、経済人の角間俊夫氏をゲストとしてお招きし、林勇二郎学長と対談していただいた。対談では、角間への想い、「角間の里」のこと、そして金沢大学のあるべき姿へと話が弾んだ。

取材・構成 地域連携コーディネーター 宇野文夫



創立五十周年記念館「角間の里」で。入り口の看板は  
本学教員で書家の李慶氏の筆による

## 生きがい生き方を 見つける人づくりを



角間俊夫(かくま・としお)

昭和15年、金沢市生まれ。慶応義塾大学商学部卒業、昭和38年に金沢乾物(現・カナカン)入社、昭和59年に代表取締役社長、平成12年から代表取締役会長。平成13年から北陸朝日放送代表取締役社長。金沢商工会議所副会頭。

林

角間さんと私の家とは近所の付き合いで、子どものころよく遊んでいたきました。「先祖はここ角間から出られたそうですね。」

角間

先祖代々がこの地に住んでいて、亡くなった父親が十代の中ごろのときに町に出たのです。私の小さいころはまだ墓があつて、年に一度は必ず墓参りに来ました。終戦後の食糧難のとき、父親が角間まで出掛けて焼き畑をしてソバを植えていました。私は子どもながらに手伝ったことを覚えています。

林

角間 この創立五十周年記念館を「角間の里」と命名した。なるほど、この建物の雰囲気にもマッチしている。名前公募したと聞きました。

全国から千件近い応募があつて、そこから「角間の里」が選ばれました。里(り)は中国・周代で25戸の集落の単位とされ、里には建物も何もない社(しゃ)という空間があつた。この社に人々が集まって五穀豊穡を祝い、祭礼が営まれることで文化が育まれた。社のもとに人が出会

うことが社会の語源となっているわけですが、金沢大学がここに移転するまでは、角間の村も自然と共存したコミュニティを形成し、文化を発信していたわけです。「角間の里」は、このことに敬意を表したものです。ここからは大学がこの地を学びの場とし、学生、教師、さらには市民・県民が集うことで、新た

## 社会貢献で地域と 大学の連携めざす



林勇二郎(はやし・ゆうじろう)

昭和17年、金沢市生まれ。東京工業大学大学院理工学研究科博士課程修了、昭和45年に金沢大学工学部講師、助教授、教授を経て平成9年に工学部長。平成11年から学長。専門は熱工学。

林

国立大学の法人化と、テレビ局のデジタル化は似ています。テレビ局のステークホルダー(企業関係者)は子どもからお年寄りまでの視聴者、自治体から企業のスポンサーと幅広く、しかも視聴率という結果が常に求められる。それがデジタル化によって一層拍車がかかる。国立大学も法人化で、学生以外に地域の人たちの生涯学習、留学生や企業人の受け入れと、大学が教育を提

角間

な知と人材を創出する。社に出会うことが「社会」であるならば、学との出会いは「学会」と言うべきものかもしれない。「角間の里」は、多くの人々が集まり、このような活動を進めるうえでの拠点としたい。こういう思いがあります。

角間 なるほど、気持ちが込められていて奥深いですね。

角間

ところ、民放も来年2006年からデジタル化という転換期を迎えます。金沢大学も国立大学法人になって、これからどんどん変わっていくように見受けられます。



特集 3

## 歴史を受け継ぐ 地域貢献の拠点

創立五十周年記念館「角間の里」が完成

Topics 6

### 特別対談「角間の里」

金沢大学長 林勇二郎 × 北陸朝日放送社長 角間俊夫

研究交流 8

### 温泉研究が街の活性化に 柴山湯から片山津再興 商工関係者と特産品開発



地域課題 10

地域課題研究ゼミナールの持つ相乗効果  
〔輪島市・町野町鈴屋地区〕

### 地域が先生となり広がる笑顔と知識

地域課題 12

地域活性化プロジェクト始動

### 大学と住民一体で 石川の特徴浮き彫りに

自然・文化 14

動植物とのふれあいから学ぶ

### 自然が先生 角間の里山自然学校



国際貢献 16

「草の根」活動と研究が結びつく

### 世界の砂漠を潤いの大地に 魔法の薬が緑化を後押し

編集委員紹介



## 特別対談「角間の里」

角間 提供する対象がとてども広がってきている。その一方で評価の行き過ぎは、注目される研究は何か、論文を何本書いたか、論文の引用は何回かなど、成果重視による弊害を生じはじめています。

林 大学として基礎研究もしっかりやらなければならぬ。一方で短期的な結果も出さなければならぬ。というのは、難しい立場になってき

林

ましたね。何かよい方策はあるのですか。

大学間競争といったものに埋没しないために、法人化に合わせて大学憲章をつくり、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」という理念を掲げました。地域に対して、知識ベースのものを念頭に置いて、知識ベースの社会づくりの核になりたいという思いからです。

林

知識は常に新しい情報を発信しています。個性を持った地域づくりには欠かせないものです。この個性をグローバルに通用する価値として地域とともに育て上げていきたいと思います。

角間 経済人でもある角間さんから見て、金沢大学に望むことは。

林

角間 金沢には、旧制・四高以来の学生と市民のよき関係が伝統としてあります。大学で学んだ人が世界に羽ばたいてほしい、また、地域に残って知の糧として活躍してほしいと市民は期待している。でも、最終的には人づくりですからね。生きがいや生き方を見出せる人を金沢大学が育ててほしいですね。

林 本日はありがとうございました。

温泉研究が街の活性化に

# 柴山瀉から片山津再興 商工関係者と特産品開発

高度経済成長期には国内で5本の指に入るほど栄えた片山津温泉。しかし、バブル崩壊後は刻々と変化する観光客のニーズに 대응することができず、客足は大きく落ち込んだ。苦悩する地元商工関係者に手をさしのべたのは、柴山瀉を活用した特産品開発を考える「温泉の先生」だった。

学生編集委員 大橋佳祐、牧内幸子



大学との連携に期待を寄せる永山会長

## にぎわい消えた片山津 「らしさ」を求め苦悩

昭和40年代当時の片山津を訪れたのは、宴会目的の団体客がほとんどだった。片山津の人々も観光客に喜んでおもうと、飲食店などの温泉街の機能を旅館内に集結させ、「そっけなく飲んで騒げる」経営を目指した。やがて元号が変わり、バブル経済がはじけると、観光客のニ

ーズも徐々に変わっていき、温泉に対して「非日常的なゆとり」を求めるようになってしまった。にぎわいの途絶えた温泉街に、必要以上に大きく膨れ上がった旅館。片山津は観光客の嗜好の変化に対応しきれないまま、落ち込む一方の客足の回復に頭を痛めていた。「そのときやっつと、片山津ならではのものがなくなっている」と片山津商工振興会の永山信也会長は振り返る。温泉街の人々は再興を目指し、「片山津らしさとは何か」を考えた。その時、多くの人から聞こえてきた意見が「柴山瀉」だった。しかし、昔から片山津のシンボルであったはずの柴山瀉は、当時はゴミ捨て場

同然に扱われていたうえに、山代、山中の生活用水が排水され、汚染が進んでいた。「汚い」というイメージが浸透してしまっていたのだ。人々は「よみがえらせよう、柴山瀉」をスローガンに、まずは清掃を始めたが、それだけの活動には限界を感じていた。

## 瀉から湧くまれな温泉 田崎教授の研究始まる

そのころ片山津の人々の苦悩とは別に、温泉について独自に研究を進める先生が金沢大学にいた。自然科学研究科の田崎和江教授である。今や「温泉の先生」として県内はもとより、全国、またその学問分野においては世界から注目されている田崎教授の専門は地球環境科学だ。「私は地球を相手にしているの」と話す通り、興味は、大気、水、土壌、そして

微生物にまで及ぶ。行動的な性格の持ち主で、阪神大震災の時には発生からわずか3日後に現地を訪れ、被害調査を行うなど、環境問題が発生すればすぐに現場に赴いて調査を進めることも知られる。

田崎教授は研究を進めていくうちに、地球環境科学にはより深い微生物の研究が必要だと考えるようになった。それまでに研究を進めた火山と周辺の温泉の調査を経て、温泉周辺の微生物に関する研究(バイオマツト研究)にも手を広げるようになったという。これが、「温泉学」の始まりだった。

ある日、田崎教授が石川県職員と雑談をしていると、温泉学の話題になった。県内の温泉にも話しが及んだところで、田崎教授にある研究のヒントが浮かんだ。川や滝に源泉がある温泉は存在するが、片山津温泉のように瀉

「片山津・温泉学」。研究成果を本にまとめた



の中から湧き出てくるタイプは世界的にもまれなのだ。「これから進めようとする温泉研究を片山津で行ってはどうか」と提案し、片山津と柴山瀉での研究活動を始めた。

## 瀉の泥や水質に着目 陶器や真珠養殖に応用

研究活動を続けていくなかで、柴山瀉を片山津の街おこしに利用できることがわかってきた。

田崎教授はまず、柴山瀉の底にたまる泥に目をつけた。地元住民が「汚いへドロ」と忌み嫌うこの泥も、田崎教授に言わせれば「利用価値のある湖底泥」。この土で焼き物ができるのではないかと考えた。陶器を作ることに成功した。その後、地元の陶芸家や金沢美術工芸大



湖底土から作られた陶器





地元の取り組みもあり、柴山潟は美しさを取り戻しつつある

学の学生が作陶に取り組み、現在では片山津をモチーフにした作品が街中に展示されている。

次に目をつけたのは、柴山潟の水質だった。調査を進めるうちに、淡水真珠の養殖ができるということが分かったのだ。母貝に入れる核の形や数を変えることで、オリジナルの真珠が作れるという。また有機物を

栄養に育つ真珠は、柴山潟の浄化にも大いに役に立つ。今はコイヘルペスの問題が浮上し、柴山潟での研究は停滞しているが、大学内での淡水真珠の養殖の研究は日々進んでいる。片山津の人々も、「お客さんに自分だけの真珠を作ってもらおう。そうすれば2、3年後にどんな真珠になっているかを楽しみに、また片山津に足

を運んでくれる。この素晴らしいアイデアはどんなことをしても実現させたい」と大きな期待を寄せている。活動は、試作だけにとどまらない。一部は商品化にもつながってきた。

片山津ゆかりの詩人にちなんで名づけられた「晶子染め」は、潟底泥中の金属元素や微生物の働きを利用して、絹を淡い紫色に染める。スカーフなどの小物が商品化される一方で、水墨画のような大作も制作されている。「観光客の方に手軽に体験してもらえるのが魅力。この晶子染めを芸術の域にまで高められたら素敵よね」と田崎教授も自身の研究が生かされることに喜びを隠せない。

さらに、金沢高校の四ヶ浦弘教諭との研究で温泉の成分が豆腐を作るのに適しているとわかり、これを利用して温泉豆腐を作るという試みにも成功した。健康に良いといわれる温泉から作られるこの豆腐は、昨今の健康ブームも手伝い、「おぼろ豆腐」として一部の旅館で出されている。これもまた、晶子染めとともに片山津の名物になることが期待されている。



「晶子染め」は薄紫色の上品な仕上がりになるのが特徴だ

気がつくくと、田崎教授と片山津の人々との連携活動が始まっていた。田崎教授は研究成果を基に、柴山潟の資源利用のアイデアを提言する。片山津の人々は提言を受け、試行錯誤しながらアイデアを形にする。そして、その成果を街の再興に繋げていくのだ。大学は地域に研究成果を還元し、地域はそれを生かす。ここに、大学と地域との理想的な連携活動が生まれていた。

### 個人的興味から連携に 研究成果を地域に還元

片山津の人々は思い出に浸ることなく、往時のにぎわいを取り戻そうと意欲を燃やしている。「片山津再生」への自信と高い意欲の裏には、もちろん田崎教授の存在もある。「大学は遠い存在だと思いつ込んでいた。研究してもらいたいという気持ちはあったが、相談しても跳ね返されるのではないかと考えていた」という永山会長の言葉に象徴されるよう、片山津の人々は大学に対して「敷居が高い」という印象があった。しかし、

活動をともにすることで、その先人観を払拭することができたという。

国立大学が法人化されたことで、大学の研究が社会に公開される機会も増え、地域との連携は盛んになった。「交流さえあれば、面白いことができる」とわかった」と永山会長が言うように、大学が開かれた存在となることで、住民の大学に対する意識も変わってきている。片山津の人々は、これからも研究成果を生かした地域との交流を大学に期待している。

一方、田崎教授も思いは似ている。「大学の社会貢献とは」との問いに、「研究成果は嬉しくて楽しくて、周りの人たちに言いたくなってしまう。それが世の中に役立って、結果として社会貢献と言われているんです」と語る。「貢献しよう」助けてあげよう」というおごり高ぶった意識は微塵もない。最初は個人的な興味から始まった。それが結果として社会貢献につながっているのだ。田崎教授は研究成果を還元して、大学の社会貢献のあるべき姿を体現しているといえるだろう。



田崎教授は持ち前の行動力で地域と交流している

# 地域が先生となり 広がると笑顔と知識

日本海の青さと山々の緑がまぶしい8月上旬、輪島市の中山間地に金沢大学文学部文化人類学研究室の学生がやってきた。地域社会調査のために1週間泊まり込み、「先生役」となる地域の人々とコミュニケーションを深めるのが目的だ。キャンパスから飛び出した「授業」を追ってみた。

学生編集委員 水越直哉

## 自分でつくる 授業がはじまる

「みんな都会行つてしまつて、若い連中も何人おるかかわらんがですわ」。珠洲市との境にある輪島市町野町鈴屋地区の大区长、坂本兼蔵さんの言葉には寂しさが漂う。能登地方の各地区と同様に、この地区の人口も減少の一途をたどる。旧町野町と旧輪島市が合併した昭和31年ごろから、世帯数とともに人口が減少し始めた。

文化人類学研究室は、町野町にある鈴屋地区と曾々木地区を調査地に選んだ。鈴屋は農林業を中心に生活し、曾々木は漁業と観光を主産業とする。こういった昔からの生活形態が今なお存続する地域、これが研究室の実習調査に適した環境であるからだ。何を調査テーマにするかは、両地区の特徴をつかんだ各学生が自

由に選べる。  
1日目は全員で話を聞くが、2日目以降は興味のある事柄を知るために、数人単位のグループになり、住民に電話し、訪問し、話を聞かせてもらう。1週間のほとんどを記者のような生活をして過ごすわけだ。「自由だったのが逆に不安だった」と漏らす学生もいた。しかし、それは学生の自主性が重んじられるということでもある。教科書のように典型があるわけではなく、興味のあることにとことんのがしほれるわけだ。  
初日、地域の集会所で学生、教授、地域住民が机を向き合せて聞き取りが始まった。学生・教授12人に対し、集まった住民は9人。学生は緊張し、住民には照れが見え隠れする。教授が質問を投げかけ、住民は頭をひねりながら回答する。  
「青年団はありますか」「ええ、若連中といつて祭りの中心になつてキリコをかついだりします。でも実際



住民と向き合つて学生は真剣にメモを取る

はほとんど金沢いっちゃってますんでねえ」。初日とあつて地域のことを知る大まかな質問が多い。しかし、ところどころに人口減少を嘆く発言もあつた。「若連中について詳しく知っている人は」「団長自体が金沢におるから聞くあてがないんですわ」。  
緊張していた場も半時間もすると談笑が聞こえ、壁はなくなつた。

## 初めて感じる 温かくなれる授業

2日目以降、学生はグループになり、さらにつつこんだ話を求めて街へと繰り出した。この日、学生3人がお世話になつたのは坂井隆さん宅。生まれも育ちもこの地で、製菓業を営む。奥さんとともにインタビューに応じてくれた屈託のないその笑顔は、この街の明るさを物語っているのかもしれない。

話題は地域の歴史から祭りまで多岐にわたる。話の途中で気になることがあれば学生は臆することなく、その場で聞く。挙式のしきたりに話



坂井さん夫婦が豊富な経験を語ってくれた



茶わんを使って地元のしきたりについて説明する坂井さん(右から2人目)

題が移ると「隣の部屋を指差ししながら」その部屋であげたんですよ。昔はここで結納からハバキヌキまでやってね「ハバキヌキとはなんですか」という具合だ。「ハバキヌキ」とはこの地方特有の「結婚儀礼」の一つを指すらしい。すぐに答えが返ってくるこの授業は、インターネットよりも簡単で信憑性があり、温かい。

「久しぶりに若い子らと話せて、私も楽しかった」と、あるおばあさんは最後に言ったという。インタビュアーだった学生の1人はうれしくて心が温かくなったと心情を話してくれた。

きつと思うところがあつたのはこのおばあさんだけではない。子どもに限らず、若い世代の減少はとまらぬ。どんな人でも温かく受け入れてくれるこの街の人たちにとって、学生との会話は決して退屈なものではなかつたはずだ。住民はみな嫌な顔一つすることなく協力的だったと学生は声をそろえる。学生は楽しく



曾々木地区では奥能登観光の歴史やキリコ祭りについて興味深い話が聞けた

## 大学の調査でも地域にメリット豊富

調査ができ、住民は会話を楽しむ。今までにない授業がそこにはあつた。



お年寄りからは貴重な話が聞けることも多い

勉強になるのは決して大学の側だけではない。ここで調査し、知り得た結果は学生のレポートや様々なデータとともに、1冊の報告書となって地区住民の手に渡る。それを基にして、住民は人口減少や高齢化への対処を探るとともに、さらに維持発展させて今後のまちづくり活動につながるよう努力していくわけだ。

今年4月1日の時点で、鈴屋地区の住民は79世帯、234人。まちの中を見渡してみても、若者の姿は目立つことはない。過去40年で約1000人の人口減というこの現状を打破する案は今のところない。先を案じて文化、習俗の形骸化を嘆く人もいる。「文化や方言は時代とともにいつかなくなってしまうだろう」。しかし、何人かのお年寄りは次のようにもつぶやいた。「こうやって大学の人が来て本や調査にして残してく

## 地域と大学が手を取り合って生まれるもの

れるのはありがたい」。その言葉に表されるように、大学の調査は地区の暮らしを活字にする絶好の機会でもあるのだ。

当然、調査団が1週間泊り込むわけだから経済的な面でも多少の潤いがある。これに前述の、まちおこしのための基礎資料の提供、文化の保存が加わる。決して、利益は大学側だけにあるのではない。

大学が地域にできること。今、「地域貢献」が教育、研究に次ぐ大学の第三の使命だと呼ばれている。大学構内にこもって何を研究しているのかわからない不透明な時代は終わった。大学は地域の中にあり、多くの学生もその中で生活をしている。研究は難しいものだから、と互いに距離を置いてもいいのだろうか。

地域貢献については「企業などにも研究した成果を還元すれば、地域の力になるし、大いに進めていってほしい」と、坂井さんをはじめとし

て賛同する人も多い。今現在も研究が地元企業と連携して新たなものを生み出そうという動きはある。しかし、多くの学生、地域住民がその存在さえ知らないのが現状だ。さらなる情報公開、地域との一体化が求められることになるだろう。

そんな現状において、地域課題研究ゼミナールは新たな大学形態の一つの骨子となりえるだろう。地域の中で研究し、成果を求めると。成果は直接地域に還元できないものもあるが、地域のためになることも多い。実践的な学習ができることは、学生にとっても得るものが多く、住民にとっても透明感がぬぐえて、大学は身近なものとなる。参加した学生はもちろん、協力いただいた地域の方にとっても、双方の間の壁が薄まり、お互いであることを知る契機となる。

地域と大学はいわば隣人。隣人が何をしているのかは当然知る必要がある。大学と地域がうまくやっていくという視点で捉えてもメリットの多い地域課題研究ゼミナール。地域と大学が手を取り合って、さらに浸透していくことを願わずにはられない。

## 地域課題研究ゼミナール

石川県が提案する助成プログラムで、県内の大学などのゼミナールが地域から提案され、または自ら提案する地域課題について、当該地域と一体となって取り組み、解決策を提言することにより、高等教育の活性化と地域との交流の拡大を図ることを目的とする。採択されれば1課題につき30万円の助成金が出る。平成17年度は計14件が採択され、金沢大学からは8件が助成を受けている。研究の成果は、平成18年1月に能登と金沢で開催する報告会で発表される。

地域活性化プロジェクト始動

# 大学と住民一体で 石川の特徴浮き彫りに

金沢大学では、地域貢献事業の中核となる「地域活性化プロジェクト」を立ち上げ、「地域経済塾」「まちづくり・観光学」「金沢学」「市民大学院」の4つの事業に取り組み始めた。それぞれの事業がどのように地域に役立っていくのか。各事業のプロジェクトリーダーに聞いた。

学生編集委員 神谷卓史



金箔工芸を体験する留学生を中心とした参加者たち。「地域活性化プロジェクト」は文部科学省の特別教育研究経費に採択されている

## 北陸特有のビジネス探る 「地域経済塾」

経済学部地域経済情報センターでは、平成15年度から「地域経済塾」を開講している。

これまで大学の研究成果は大学や学会のなかだけで完結しがちで、地域に生かされることが少なかつた。一方で、「大学は地域の現状を本当に理解しているのか」という問題意識も学内にはあり、学問を地域に還元し、同時に地域から研究課題を吸い上げたいとの思いが徐々に芽生え始めた。経済学部の碓山洋教授は、「石川、特に金沢には、潜在的な可能性があるが、それが地域経済活性化に十分に発揮されていない。グローバル化の進む弱肉強食の世界の中で、その波を乗り越え、独自の経済発展、つまり競争しながら共存し、地域全

体で発展していく持続可能な経済発展の形成に貢献したいとの思いがあった」と、この講座を開いた背景を語る。

地元の参加者の中には、金沢の経済の特質が歴史とどのように関わっているのかわらなかつたという人が多く、講義を聞いて驚くこともあるという。参加者は社会人がほとんどで、地元と他県出身者が半々。講義の形式も従来のような教員の話を受身で一方的に聞いているだけではなく、ワークショップやディベートなどを取り入れ、教員と参加者の双方が積極的に関わるようにしている。

参加者は、講座が終わった後も、自主的な交流を続けている。地域経済について話し合いの場を設けることは、街に対して認識を深めることであり、この話し合い自体も広い意味では地域活性化に結びつくとも言える。

「魚屋さんだったら魚を売る。靴屋さんだったら靴を売る。それぞれに役割があるように、大学だったら今日まで培ってきた学問の調査、研究成果を地域の人々に還



地域経済塾。今年は奥能登教室も開講した

元すればいいのです。地域の方々は税金という対価を払っているわけですから」と話す碓山教授。大学の地域活動で大切なのは、一回だけの活動で終わるのではなく、長期的視点で継続させることだ。短期間では、なかなか地域からの評価は得られない。継続的に活動が続けるからこそ周りが注目してくれるのである。北陸でのビジネスは保守的な面が強く、いかに文化と結びつけるかがキーポイントとなっている。地域経済塾はそんな北陸特有のビジネスの特徴を考慮したセミナーであり、北陸のビジネスについて詳しく知りたい人に役立っている。

## 文化資源を掘り起す 「まちづくり・観光学」

まちづくりに関してはどうだろう。 「まちづくり・観光学」事業は、石川県内の自治体や民間非営利団体（NPO）の協力のもと、学生の長期のインターンシップや



NPO職員と打合せをする学生。  
インターンシップで地域活動に参画した



地域調査実習を通して地域と連携する形を探っている。大学の教員が教えるよりも地域の住民と一緒に、学生自らが何ができるかを考え、主体的に行動するところが特徴的だ。活動は地域住民へのアンケートや聞き取り調査、地域活動への参画など様々である。

まちづくりに学生を派遣する理由に、文学部の鏡味治也教授は「加賀、能登地方では、若者の数が少なく、若い人がもつと積極的に来て欲しいという声を聞く。若者の目で地域の埋もれている文化資源を見直し、掘り起こしてほしいから」と話す。「地域の人々と一緒に考えさせてください」という姿勢が大切であり、「こうすれば必ず街や地域が活性化する」という正解はない。地域がこれまで大事だと思っ

鍵だということを、地域の人に再認識してもらうことが「まちづくり・観光学」の目的でもある。

### 留学生が観光大使に「金沢学」

今年で4年目を迎える「金沢学」は、日本文化を学びたい留学生や日本人学生、地域住民を対象に、金箔、加賀友禅など「体験」と「講義」の両面に重点を置いた文化体験学習講座である。留学生センターの八重澤美知子教授は「東京での茶道体験と、金沢のそれとは全く意味が違います。金沢には昔の伝統文化や風土がそのまま残っており、茶室全体が博物館となっていると言っても過言ではないでしょう。そういった空気の中で茶道の体験学習をすることは、伝統文化をそのまま生かした『日本』を学ぶのに、必要不可欠なこと」と言う。また、金沢学では宿泊を挟むため、学生、教員、地域住民同士の、キャンパスでは話せない率直な意見交換も自然と生まれる。金沢学がもたらす効果について、八重澤教授はこう話す。「金沢学には文化を発信する役割があります。金沢学を学んだ留学生や日本人学生が自分の国や地域に帰って、金沢の文化を伝えます。こうして一人ひとりの学生が国内はもちろん、

世界に日本の文化を伝える『掛け橋』となることが、大学の地域貢献へとつながるのではないのでしょうか。」

世界都市宣言をしている金沢市。金沢学で理解を深め、日本国内はもちろん帰国した留学生の体験談を通して文化を広めるとともに、地域住民には、金沢の魅力を再発見し関与する機会を提供している。

### 身近な研究テーマを指導「市民大学院」

普段から研究テーマを持った地域住民に対して、大学の教員が一年間にわたって論文も含めた指導を行う「市民大学院」。参加者は、時間的にも余裕がある中高年層の人が多い。身近にある疑問を拾い出し、各個人それぞれが自主的に調べ、毎回の講座で教員の指摘を受けながら論文にまとめあげる。「北陸の宗教と民族」「金沢ゆかりの文学者たち」「現代の韓国と北朝鮮」の3講座があり、定員は各10人ほど。少人数なのも熱意と意欲を持った受講者に細かい個人指導を行うためだ。文部科学省の「地域活性化プロジェクト」に採択されたこともあって、料金は30回の講座で9千円と安い。これからの市民大学院のあり方について、文学部の島岩教授は「地域活性化プロジェクトは5年計画とされていますが、地域文化の継承を考えると、5年経ってもこのプロジェクトが続くようなシステムを作りたいですね。また、同じ人が何年も関わっていると、講座内容がマンネリ化してしまう恐れがあるので、どんどん人を入れ替えられると講座も活発になるでしょう」。地域と大学がそれぞれ相手をよく知らないことが「心の距離」を作り、互いに近寄り難い雰囲気を作っている原因ではないかと考える島教授。両者の情報交換がスムーズになれば、自然と距離は縮まってゆくだろう。そうなれば大学と地域によるコラボレーションが生まれ、新しい未知の領域に突き進む大きなきっかけを生み出すはずである。

### 疑問や悩みを共有し一緒に解決方法を探る

大学の地域貢献を考えると、一般的な講義形式の講座や学生による奉仕活動など、一方通行的で、しかも全国どここの地域でも通用するような内容をイメージする人はいまだに多い。しかし、全国の各大学ではさらに一歩踏み込んだ形の貢献が目立ち始めてきた。取材した4事業をみてみてもわかるように、金沢大学では以前から地元ならではの文化的土壌や歴史などに着目し、そこで暮らす人々の



市民大学院の一場面。参加者がそれぞれの研究テーマについて発表している

素朴な疑問や悩みに答え、解決の糸口を一緒に模索してきた。また、地元住民だからこそ気づきにくい見落としやすい郷土の「魅力」や「誇り」をわかりやすく伝え、地元よさを再認識してもらう努力も続けている。全ての事業が結果として「まちづくり」につながっているのである。

これらの活動は、金沢大学が地域に根ざした大学であることを改めて示すとともに、「今後もより深く地域と密着していきたい」という意思の表れでもあるのだ。どちらが主でも従でもない。大学と地域住民が一緒に歩むという姿勢を持ち続けることが、これからの高い地域貢献を育んでいく。

動植物とのふれあいから学ぶ

# 自然が先生、 角間の 里山自然学校

貴重な自然が今なお残り、多様な生き物が暮らす里山。それらはとても尊く、人々の心を惹きつける。里山で動植物とふれあい、何かを感じ取ることが、自然を失いつつある現代人にとって大切なのではないだろうか。「角間の里山自然学校」を利用している金沢市立田上小学校、金沢大学教育学部附属養護学校で、里山が果たす教育的役割について聞いた。学生編集委員 松田悠希、菅原洸



田上小学校は秋に千歯こきで昔ながらの脱穀に挑戦した

**新たなものを発見する  
楽しさ学ぶ**

金沢市立田上小学校が里山自然学校を利用するようになったのは、「森林と私たちの生活の1コマ」という社会科学授業がきっかけだった。現在は5年生が「総合学習」という授業枠で里山を利用している。今年も、周辺を散策しながら里山とは何かについて考えた。

米作りでは「金沢の稲作」で、先人の知恵を学んだ。里山の湧き水を水田に引き込み、自然のおいしい水を稲にも与えるという話があり、植物を育てるには水道の水を与えるものだと思っていた子どもたちは驚いた様子だった。親や先生から「自然を大切に」と言われてきた子どもたちは、教室での学習とともに、実際に里山を通じて「なぜ大切にする必要があるのか」を一步踏み込んで学ぶことができた。田植えでは「今までしたことがなかったから、泥だらけになって楽しかった。泥に足を入れるときの感じが気持ちいい」と満面の笑顔をこぼしていた。



親子でサツマイモの収穫をした

**里山の影響力  
子どもたちに変化が**

金沢大学教育学部附属養護学校は里山自然学校創設以来7年にわたって連携して活動に取り組んでいる。

里山に慣れ親しみ、学びの場として、また、生活に深くかわる場として理解されるようになれば、子どもたちは好奇心をもつて自らより多くを学びとるようになるだろう。そして、子どもたちの笑顔が里山にもっと広がっていくだろう。

今年、里山を利用する頻度が増え、恒例の竹の子掘りや流しそうめん、里山ウォークラリー、豚汁作りなどさまざまな活動を行っている。障害を持つ子どもたちが、活動に積極的に参加し、それぞれ



夏に里山の竹を使って流しそうめんを体験した附属養護学校の子どもたち

「自然は先生から学ぶものではなく、自然そのものが先生なんです」と佐川助教は語る。学習順序に関係なく、自分の興味や関心にそって学ぶことが、「誰にも教えられずに何かを発見することにつながる」のだという。里山学習のよい点は、教える人、教えられる人の関係がないところである。自然の中の子どもたち

は教室から離れて、自然な状態で感性のままに体験し、そこから何かを得ていくことができる。子どもたちだけではない。我々にとっても里山は重要な場所である。現代人は常に時間に縛られており、「自然の時間」から切り離されて暮らしていると佐川助教は考えている。本来時間とは「時の間(はざま)」であり、あるときは速く、あるときはゆっくりと流れるものなのだが、現代では秒針の刻む音におびえながら暮らすようになってはいないだろうか。「自然の時間」はゆったりと

流れ、そこから生まれる発想は豊かで、人間の感性を育んでくれる。だからこそ、子どもも、大人も里山を訪れ「自然の時間」を感じてほしいのだと語る。

**限らない自然の宝庫  
里山活動に参加を**

里山自然学校の活動を取材して、「自然は貴重で素晴らしいものである」とあらためて思った。生活の根底にあるのは自然であり、私たちの生活を豊かにしてくれる大切な



春の田植え。なかなかできない体験に子どもたちも大喜び

なものである。自然は子どもたちに楽しさ、安らぎなど様々なものを与えてくれる。特に豊かな自然が身近にない今の子どもたちにとっては貴重であり、影響力がある。木や花、昆虫などを直接目で見て、手で触れると、新たな発見が生まれる。教科書やテレビだけでは感じられない自然の匂いや実際の色、形、大きさなど、学べるものは限りなくあることを知った。自然の大切さを刷り込みのように覚えるのではなく、自ら感じて考えるようになることこそが重要であるのではないだろうか。里山自然学校は自然を直接体験する場を提供して、教育支援に貢献しているのである。

しかし、広報活動が不足しているためか、里山自然学校の存在は意外に知られていない。特に金沢大学の学生が知らないのだ。里山活動のサポーターとして登録する「里山メイト」には、400人を越える地域住民が登録しているという。しかし、大学が主催する里山の活動に学生の姿がほとんど見られなく、活動に参加している人たちのコミュニケーションの場である。そのことを地域住民はもろろん、金沢大学の学生にもっと知ってもらいたい。そして活動にぜひ参加してみたい。この記事を読んでほしい。自然が子どもにも与える影響を知り、あらためて自然の大切さを考えてもらえたら嬉しいと思う。

**直接触れなければ  
わからないもの**

の楽しみ方で有意義な時間を過ごしている。

最近、子どもたちの間に変化が起き始めている。里山へ来るとより穏やかになり、のびのびとしている。草花や昆虫にも興味を持つようにもなってきた。これは「子どもたちとの関係が密接になってきている里山の存在が大きいのではないか」と、同校の箸本淳也教諭は考える。今後、里山での学習を続けていけば、子どもたちの生活が豊かになり、後に大きな財産となることは間違いないだろう。教室では学べないこと、自然に触れ合う楽しさ、植物、昆虫などを自分で見つける喜びがここにはある。自然に直接触れることによって、子どもたちに良い影響が現れることを期待したい。

「子どもたちにとって大事なことは直接体験。きれいなストーリーをいくら用意しても、『勉強』としては反応できるが、『実感』としては反応できない。自然に直接触れて感じて欲しい」。こう話すのは里山自然学校事務局長を務める教育学部の佐川哲也助教である。里山自然学校では、子どもたちの学習を最も重要であると捉えている。現代の学校教育は教科書が中心であり、それ以外のことを子どもたちは知っていないように知らない。そこで「生の自然」を直接体験によって感じてもらいたいのだ。

それでは自然を体験し、学習するとはどういうことだろうか。

「草の根」活動と研究が結びつく

# 世界の砂漠を潤いの大地に 魔法の薬が緑化を後押し

4分ごとに金沢大学角間キャンパス分の緑が砂に覆われてしまう。地球規模で進む砂漠化が、深刻な環境問題の1つとして認知されて久しい。そんななか、金沢大学薬学部の染井正徳教授が植物の根の長さを倍にする「生長薬」を開発し、金沢市内のNPO法人「世界の砂漠を緑で包む会」とともに、砂漠の緑化活動に乗り出した。この魔法のような生長薬は、砂漠緑化の「切り札」となり得るのだろうか。

学生編集委員 高場治子

## 70万日で、砂漠の惑星” 急がれる地球規模の緑化

環境問題が騒がれる今日、「砂漠化」という言葉は誰もが耳にしたことがあるだろう。ちょっとインターネットで調べてみてほしい。1秒間で1万平方メートルもの面積が砂で覆われ続けている。単純計算すれば、緑の大地が無くなるまであと70万日もないということなのだ。

信じられるだろうか。私たちが寝ているときでも食事をしているときでも、常に砂漠が広がっていて、死に近づいているのである。いったん砂漠化してしまった土地は、膨大な労力と資金をかけなければ元に戻すことができない。砂漠化をくい止め、緑の大地を増やすことが急務となっている。



生長薬について説明をする染井教授

鳥取大学乾燥地研究センターの資料によると、砂漠化は気候的要因と人為的要因の2つに分けることができ、気候的要因が13%、人為的要因が87%という。人為的要因のうち、最も影響を及ぼすのがヤギや羊の過放牧だ。古来、人は衣服などで羊毛を好んで使っていたが、近年になつてヤギの毛を原料とするカシミヤが流行りだした。ヤギは羊と違って草の根まで食べてしまう。

砂漠化は、こうした悪循環でより広がっている。決して遊牧民たちに責任があるのではない。遊牧民たちは放牧で生計を立てなければならぬし、過放牧だけが砂漠化の原因ではない。また、気候的要因には人間が関与している場合も多く、環境問題に無関心の人々が砂漠を広げているとも言えるのだ。

## 多方面で役立つ生長薬 植物の代謝を利用し開発

染井教授が開発した魔法の薬は、食糧危機をはじめ男性の不妊治療



生長薬を散布したぶどう(右)は、散布していないぶどう(左)にくらべて明らかに実の付き方が多い





植樹活動の様子。毎年数十人の会員が現地に渡り植樹活動をしている

など多方面で役立つという。そんな生長葉は植物の根の長さや太さを倍にもする。

植物の「体内」では、様々な化学物質が働いている。芽を出す時は発芽ホルモン、花を咲かせる時は開花ホルモン、生長する際には生長促進ホルモンが作用する。生長促進ホルモンの「オーキシン」は、トリプトファンというアミノ酸が植物内で代謝され

たときなどに発生する。オーキシンは植物の根の生長も促進させるので、砂漠緑化にも応用できる可能性がある。染井教授は植物自体が使っているホルモンの代謝を考察し、代謝物の構造を化学的な方法で「修飾」して生長葉を開発した。つまり、植物の代謝を利用したのである。

「何でも想像してみなきゃ始まらない。突拍子もないことを想像する



活動は現地の住民とも連携している

世界の砂漠を緑で包む会は、大沢俊夫事務局長とケニア砂漠でくずの種をまいた坂井昭保さんが協力し、

### 現地活動で深刻な水不足 厳しい気象条件が足かせ

第二次世界大戦が始まった時期に生まれ、食糧難を経験した染井教授。中学生のときに「砂漠を緑に変えよう」という内容の本と出会い、啓発され、食料増産とその解決の糸口ともなる砂漠緑化が夢になったという。その夢を実現してくれるであろう生長葉に、現在では多くの人々が期待を寄せている。

ことから全て始まる。「想像」から「創造」するんだよ」と染井教授は言う。「生長葉」も「自分が神様だったら植物を生長させるホルモンを、役目が終わったといつてそのまま無駄に捨てたりはしない。代謝の過程でまた違うホルモンに変えて利用しつくす」という考えのもとで「創造」されたものなのだ。



発根実験用の種を生長葉に浸している。生長葉の濃度を変えた数種類の種を準備した

会は初め、クズの種で緑化に踏み切ったがうまくいかなかった。日本の植物(クズ)は発芽はするのだが、水不足や強い紫外線によって枯れてし

を感じたのだ。

このように忍耐強い作業を続けた結果、今年5月には3000ヘクタールの砂漠地で現地の植物30万株が生育するまでになった。あと2年もすれば、見た目でもわかるくらいに砂漠が緑の大地になるのだという。

平成10年に発足した。県外を含め約480人の会員があり、9割が金沢市民の団体だ。砂漠緑化に情熱を注ぐ会員が年数回、内モンゴルに出向き、植物を植えている。

会の発足は、中国内モンゴル自治区の留学生が、平成7年に大沢事務局長宅でホームステイをしたのがきっかけだった。平成9年、大沢事務局長は留学生の招待で、アラ善(アラビヤ)を訪れ、遊牧民の家屋が広大な砂漠に埋もれている光景を目のあたりにした。かつてはそこも緑が生い茂る場所だったという。「誰でもあの光景を見たら「緑化しなければ」と思うはず」。その瞬間、大沢事務局長は砂漠の緑化活動に取り組むことを決意した。以前から環境問題に興味があったわけではなく、自分の目で砂漠を見て緑化の必要性を感じたのだ。

### 新聞記事が「学」「民」結ぶ 同じ夢に向かって協力へ

砂漠にはほとんど水が無いと思われているが、50センチメートルほど掘れば湿った砂が出てきて、地下約100メートルのところには水脈が走っている。つまり、植物の根を伸ばす「生長葉」は砂漠緑化に活用できる可能性があるのだ。

生長葉が完成し、「さて、どうやって砂漠緑化に踏み出そうか」と染井教授が考えていたところ、大沢事務局長は新聞に掲載されていた「生長葉

まったり、寒さで根が凍結して越冬できなかったりした。そこで、平成15年からは現地の植物(ザグ、ナツメ、エンジュ、ヨウシ)を使った砂漠緑化プロジェクトをスタートさせた。日本とモンゴルの両政府をはじめ、環境財団や現地の住民、学校も協力し、約2トンの種を蒔くようになった。

それでも水不足対策は深刻だ。日本のたった1日分の雨が、年間の総雨量と等しいアラ善砂漠。平成16年には、外務省の「草の根・人間の安全保障無償資金協力」によって「地下水かんがいシステム」を整備したが、ここで利用している地下水脈にも限界があり、現地の専門家の助けが欠かせない。



大学との連携に期待を寄せる大沢事務局長(左)と南出さん(右)

根の長さ・太さは  
まちまちだったが、  
浸した種から出た  
根は、生長薬を使  
つてないものより  
も長く、太かった。  
こうして予備実験  
は期待通りの成果  
を挙げた。

しかし、別の問  
題点も浮上してき  
た。現地では、生長  
薬を作る装置や重  
量測定用の道具が  
調達できないのだ。  
日本で生長薬を作  
つてから運ぶにし  
ても、飛行機の中  
でこぼれたり、税

関で没収されたりする恐れがある。  
「地球の薬(生長薬)を有効に使うた  
めの課題がたくさん見つかった。国  
を超えての事業の大変さがわかつた  
よ」と語る染井教授だが、もちろん  
落ち込んでない。10年、20年  
後の活動を見据え、「世界規模のこ  
とだから緑化には膨大な時間がか  
かるだろうが、可能性は増えた。大  
学と地域の連携で地球規模のこ  
とができてしまうのがすごい。死ぬま  
でに、確実な一手を打てたら最高の  
幸せ」と表情は明るい。

大沢事務局長も「染井教授のおか  
げで可能性が広がったので、皆さん  
のさらなる協力を得て緑化を大き  
な流れにしていきたい」と決意を新  
たにする。

「次からが本当の実験」と気を引  
き締める染井教授。平成18年に  
行われる予定の植樹実験では、今回  
の問題点もきつと解決されるだろう。  
そして、いつか世界中の砂漠が緑で  
いっぱいになり、様々な環境問題が  
無くなる日が来ることを切に願う。

「発明」の記事を読み、高まる気持ち  
を抑えながら教授宛てにメールを送  
った。「学」と「民」との出会いだっ  
た。世間では「産学官連携」がクローズア  
ップされ、大沢事務局長もそれぞれ  
の持てる力を出し合つて協力するこ  
とを望んでいたのだ。

8月初め、生長薬を使った最初の  
予備実験を行うため、染井教授は  
会員とともにアラ善砂漠に赴いた。  
生長薬の効果ははっきりと表れ、  
「砂棗(スナナツメ)」という現地の植  
物がしっかりと芽を出した。その  
後、ほとんどの芽がネズミに食べ  
られてしまったが、わずかに残った砂  
棗が約70日後に掘り出され、大沢  
事務局長や会員の南出武夫さんら  
の手によって日本に持ち込まれた。  
南出さんの観察記録によると、生長

薬の濃度によって  
根の長さ・太さは  
まちまちだったが、  
浸した種から出た  
根は、生長薬を使  
つてないものより  
も長く、太かった。  
こうして予備実験  
は期待通りの成果  
を挙げた。

「次からが本当の実験」と気を引  
き締める染井教授。平成18年に  
行われる予定の植樹実験では、今回  
の問題点もきつと解決されるだろう。  
そして、いつか世界中の砂漠が緑で  
いっぱいになり、様々な環境問題が  
無くなる日が来ることを切に願う。

「次からが本当の実験」と気を引  
き締める染井教授。平成18年に  
行われる予定の植樹実験では、今回  
の問題点もきつと解決されるだろう。  
そして、いつか世界中の砂漠が緑で  
いっぱいになり、様々な環境問題が  
無くなる日が来ることを切に願う。

阿拉善砂漠に緑が戻り始めてきた

予備実験の成果は上々  
薬の現地生産が課題に

阿拉善砂漠に緑が戻り始めてきた

阿拉善砂漠に緑が戻り始めてきた



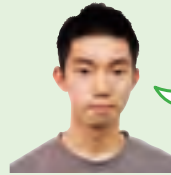
阿拉善砂漠に緑が戻り始めてきた

# 編 集 委 員 紹 介

8人の金大生が「雑誌を作りたい」という同じ気持ちで知り合った。  
苦難を乗り越え、目標を達成した今、8人の心境は……。



**水越直哉** (みすこしなおよ) 文学部人間学科3年  
今ある可能性を追求したい。限られた大学生活、何かしてやりたいという思いで参加したこの企画。提案、取材、執筆。無駄な経験なんてありませんでした。これを糧に就職活動も気合を入れて頑張りたいと思います。



**山内学** (やまうちまなぶ) 文学部史学科3年  
学生がつくる大学広報誌。そんな響き以上に僕が求めたものは「学生生活で何かを残す」こと。その達成は並大抵ではなく、多くの取材から一つの記事にまとめても、修正の嵐……。しかし最後は多くの貴重な知識とともに、自らの足跡を残すことができました。

**牧内幸子** (まきうちさちこ) 法学部法学科3年  
「伝える」ということはとても大事なことで同時に難しいこと。言葉が足りなかったり、表現ひとつ取り違えたりただけで与える印象は変わってしまう。今回、この大切なことを再認識できる機会を得られたことに感謝しています。



**大橋佳祐** (おおはしけいすけ) 法学部公共システム学科3年  
よそよそしい自己紹介からはや半年、みんなを引っ張っていくというよりは、足を引っ張っていましたが楽しかったです。山本さんを始めとする社会貢献室の方々、定江さん、取材をさせていただいたの方々、編集委員のみんなありがとうございます。



**高場治子** (たかばはるこ) 教育学部人間環境課程3年  
「編集・出版」って何をやるのだろう。そう思って始めた編集委員でしたが、いろいろな人と出会っていろいろな考えが一つになって、記事ができると学びました。努力が結果として形になりました。そしてこれが多くの人の手にわたるといいなと思います。



**松田悠希** (まつだゆうき) 教育学部人間環境課程2年  
私はマスコミに興味があって参加させて頂いたのですが、編集委員がこんなに大変な仕事だとは思っていませんでした。おかげで取材の仕方や記事の構成、レイアウトなど多くのことを学べ、ますます興味が湧きました。これから、もっと勉強していきたいです！

**菅原光** (すがはらひかり) 教育学部人間環境課程2年  
編集委員の活動を通して、金沢大学を今までとは違う視点から見ることができた。また、自分自身の大学生活を見直すきっかけにもなった気がする。この活動に少しでも参加できて本当によかったと思う。



**神谷卓史** (かみやたかし) 工学部電気電子システム工学科2年  
社会貢献室の職員、能登印刷の方々、取材に応じてくださった方々、さらにインターンシップでお世話になった学部編集部の皆様方には本当にお世話になりました。その他の関係者の方々にも心から感謝致します。

## 【社会貢献室】

- 橋本 哲哉 (室長・理事・副学長)
- 上口 大介 (室長補佐)
- 川島 平一 (地域連携コーディネーター)
- 宇野 文夫 (地域連携コーディネーター)
- 稲置 慎也 (地域連携コーディネーター)
- 山本 秀樹 (地域連携コーディネーター)
- 掛野 由香 (初等中等教育支援コーディネーター)
- 鈴木 太郎 (情報企画課長)
- 岩井 克義 (社会貢献係長)
- 中村 浩二 (自然計測応用研究センター教授)
- 服部 英二 (大学教育開放センター教授)
- 木之下英二 (教務課長)
- 中村 晃規 (研究員)
- 笠木 哲也 (研究員)
- 毛利 泰江 (研究員)
- 菊本 舞 (研究員)
- 小柴有理江 (研究員)
- 橋爪 尚子 (調査員)
- 由良 信道 (室顧問・情報部長)

さて、今号には前号以上にこだわりがあります。そこで、学生編集委員が思いを入れたこだわりを「読みどころ」として紹介します。それはズバリ「地域の声」です。今号の活動は本誌の目的や主要読者層、独自性などの再検討から始めました。「新たな連携の創出」との大きな目標を掲げ、達成の鍵として注目した一つが「地域

学生の編集委員は大学の広報業務に関わるという重責を担い半年以上に亘って活動しました。完成までに長期間を要する編集作業は、人一倍の努力がなければ続かない活動です。そして学生の皆さんはやり遂げた。その情熱に敬意を表します。

地域連携コーディネーター 山本秀樹

● 編集後記 ●  
始まりは、夏至の少し前でした。特別講師を招いて広報ゼミを開講し、集まってきた学生が編集委員になりました。それから、立秋・秋分・立冬を経て……今はもう冬至の頃。紆余曲折を経ての刊行だけに、今、本誌を手にとったにいたっていることをうれしく思います。

手「の声」です。学生たちは、連携相手の声を多く盛り込もうと、北は輪島市・南は加賀市・東は旧白峰村にまで取材の足を伸ばしました。住民が語った話には、学生だからこそ聞けた本音が出ています。読者の皆様には、この「読みどころ」から大学と地域の連携の可能性を感じていただきたい。そして新たな連携のきっかけを掴んでいただければ幸いです。

## 金沢大学 社会貢献室

地域のニーズに応える  
「大学の総合窓口」

◆

大学の知と地域のニーズを繋ぐ  
「コーディネーター」

◆

大学の社会貢献に関する  
「情報発信拠点」

〒920-1192  
金沢市角間町 (金沢大学附属図書館内)

**TEL : 076-264-5290**  
**FAX : 076-234-4052**

E-mail: [chiiki@ad.kanazawa-u.ac.jp](mailto:chiiki@ad.kanazawa-u.ac.jp)  
URL: [http://www.ad.kanazawa-u.ac.jp/ad\\_chiiki/index.htm](http://www.ad.kanazawa-u.ac.jp/ad_chiiki/index.htm)

# 金沢大学創立五十周年記念館 角間の里




## 自然と調和した、大学と地域の交流拠点


「角間の里」は、金沢大学創立五十周年記念事業の一つとして、卒業生をはじめとした多くの方々からの寄付によって創設されました。地域の住民、本学同窓生、教職員、学生など、だれでも利用できます。

## 280年の歴史を持つ古民家の再生


金沢大学が「創立五十周年記念館」にふさわしい、伝統ある民家を探していたところ、石川県白山ろく旧白峰村の豪農民家山口家と出会いました。この山口家は築280年の歴史と風格を合わせもち、村指定有形文化財として移築保存されていました。山口家を角間キャンパスに「角間の里」として移築することは、金沢大学が目指す「自然との共生」「社会貢献」の推進につながり、今後の発展が期待されます。「角間の里」は「角間の里山自然学校」の活動拠点にもなっています。




**2階ホール**  
▼利用規模  
20~50人



**1階研修室**  
▼利用規模  
20~50人



**前庭**  
▼利用規模  
50~100人



**多目的ホール**  
▼利用規模  
20~40人

◇木造三層建 建築面積約360㎡、  
延床面積約500㎡

◇設備  
・冷房なし、個別暖房  
・光ファイバー、ITコンセント  
・プロジェクト、スクリーン  
・机、パイプイス

### 施設利用のお問合せ

〒920-1192 金沢市角間町

Tel : 076-264-6698 Fax : 076-264-6699

E-mail : [info@satoyama-ac.com](mailto:info@satoyama-ac.com)  
<http://www.satoyama-ac.com/>

【開館時間】9時から17時

【休館日】毎週日曜日・月曜日

12月29日から翌年の1月3日まで

